退職・別府・東京—雑感

岡　田　　茂

いま、私は東京の自宅でこの原稿のパソコンをたたいています。ここは、関東平野の一角、多摩川の中流に近いマンションの５階です。大きな団地の南側の端にあり、目の前は中学校の校庭と公園で、みどり濃い木々の向こうに多摩丘陵と丹沢山塊、その右手に晴れていれば富士山が見えます。とは言っても、その中学校の先は別のマンションで、これらの山々は我が家から見える景色の一角にすぎません。それでも天気さえ良ければ富士山が見える部屋は、いまの東京では景色の良い部類に入るでしょう。

私は、３月に別府大学を定年退職して、５月にこの旧居に戻ってきました。西日本図書館学会大分県支部の皆さん方にはゆっくりごあいさつする機会がなくて、たいへん失礼をしました。この紙上を借りてお詫びいたします。定年と言うのは人生のひとつの区切りで、好むと好まざるとに関わらず直面せざるを得ません。いろいろの考えがあるでしょうが、私はこの区切りはあった方が良いと思っています。人生80年と言いますが、どんな人でも何回かの区切りがあるでしょう。私は、定年は2度目で、ご承知のように、紀伊国屋書店で一度目の定年——これは、38年間の長い在職の結果の定年でした。別府大学での定年は、５年半と言う比較的短い期間での定年でした。私の人生は、ものごころ付いてから、中学高校時代、大学時代、紀伊国屋書店時代の前半、その後半、別府大学時代と言う区切りを経過しました。私は、リタイアとか余生とか言う言葉はきらいで、一方、生涯現役と言うのも自分には無理だと思うのです。今は、これからの人生をひとつの区切りと考えて、どう組み立てようかと模索中です。引越しがやっと片付いたところですから、今後半年ぐらいの間にバランスよく組み立てたいと思います。もちろんもう66才ですから、8時間勤務の職業ではなくて、ある程度の社会的な仕事と、趣味的な時間と、もし出来れば若干の収入とを組み合わせた過ごし方を組み立てるのが目標です。これは不可能なことでしょうか。或いは、無理な希望でしょうか。私は可能性はあると思っています。60代から70代にかけての人はみんなこう言う人生を希望しているのではないかと思います。日本の社会は老人に冷たくて、老人が意欲を失うようなはなしがあふれています。しかし、私たちは、敗戦の焼け跡から立ち上がって、何らかの分野で、今日の日本を築いてきた世代です。現在の健康や条件に個人差はあるとしても、今日のこの日本社会の中でもう少し年齢にふさわしい存在の場を与えられても良いのではないでしょうか。この年齢の人々はみんな、歳をとってからも社会的つながりのある人生、自分の過去の経験をそれなりに評価してもらえるような人生を望んでいます。私もこのような希望を実現するために、これから多少努力するつもりでいます。

このような今後の人生の構築には、山登りにたとえると、ルートファインディングの努力が必要です。山を歩くときは、最初は登山路や道標、ガイドブックを頼りに歩きますが、少し山奥に入ると、ケルンや鉈目、踏みあと、磁石などによって自分の現在地を確かめ、ルートを探す場面に遭遇することがあります。私も20代30代のころは、奥秩父や南アルプスで、薮こぎ・沢登りなど、こ

のようなルート探しの登山を経験しました。路に迷ってビバークしたことも何度かあります。いま人生60代の後半になってみると、私のこれから探る路は、道標やガイドブックは通用しなくて、鉈目・踏みあとに頼る山登りのようなものです。頼りになるのは、経験と勘、先輩友人からのアドバイスなどです。これらを頼りになんとか路を探して、有効な組み立てに成功したいと思っています。それにしても、別府での約6年間は、私のこれまでの人生では画期的なものでした。初めての東京以外での生活、大学図書館と言う職場、九州の歴史と風土、これらはあらためて私に日本は広いと言うことを教えてくれました。特に私が言いたいのは、人と人との付き合いに「ゆとり」があることです。東京での「ゆとり」の無さとの比較で非常に印象深く感じました。それは、田舎とかのんびりとか言うこととは少し違うものです。別府でも、テレビ、車、パソコン、インターネットなどの社会生活はそれほど東京とかわりません。ネットワークを通じた情報の伝達は、当然のことながら、東京で生活している圧倒的多数派のネットワークに接続していない人々よりも早くなります。図書館の世界も、私は県立図書館を利用していたので――車は運転出来ないので、電車で西大分から通っていましたが――いまの住まいでの、府中市立図書館よりはずっと便利で有効でした。ちなみに府中市立図書館は、20年以上まえに建てられたもので、県立と市立の違いもあり、蔵書数も設備も大分県立図書館にはるかにおよびません。この図書館の分館は私の住まいから歩いて10分くらいのところにありそれなりに便利ですが、蔵書は小説が主で知的要求にこたえるにはきわめて不充分です。このような現代生活上の利便性から言えば、別府での生活がそれほど田舎なわけではありません。私の言う「ゆとり」とは、このような利便性はそれなりにあることを前提としながら、更に、別府の方が人間関係に時間的な余裕があると言うことです。たとえば、路を歩く人はあくせくしていなくて、電車やバスも座れるし、のんびり出来る温泉も多くて、なによりも人の数が面積空間にたいして少ないことです。このような環境の中では、自分がものを考えたり、意思決定したり、人と付き合ったりする際に気分的なゆとりが持てます。逆に東京は人の数が多すぎて、何をするにも人の多さを意識せざるをえません。時間があるのに、無いような気がしてしまいます。東京への一極集中、過密都市化の弊害なのでしょうか。もっとも、この別府観には私の趣味嗜好に関わる次のような点もあります。一般に、地方都市で不充分なものとして、映画、演劇、音楽会、美術展などがあげられるのですが、私は芸術音痴でこの分野の不充分さはあまり気になりません。また、別府ではほとんど近所付き合いをしていませんので、面倒な人間関係には関わらないで済んでいたのでしょう。ともあれ、私は別府が好きで、東京よりも住み良いと思っています。出来ることならあと10年ぐらいしてから、もし生きていたらもう一度別府に住みたいと言うのが率直な希望です。

これからもときどき東京から寄稿したいと思います。

（おかだ　しげる）